ガラスのエース

四季 雅男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガラスのエース

【Ｎコード】
Ｎ９６８０Ｔ

【作者名】
四季　雅男

【あらすじ】
右肘靭帯損傷という大怪我から復活を目指す進藤智仁。現役引退を賭けたシーズンが始まろうとしている。

復活にかけた男の1年

新年を迎え、智仁は今年の意気込みを絵馬に込め、神社を後にした。今年でプロ野球
生活十四年目を迎え、ベテランの域に入っていた。彼は、甲子園準優勝投手という肩
書を背にドラフト一位で東武レオンズに入団した。ルーキーの年こそ二軍で暮らした
が、二年目からは華々しい活躍で、一躍球界を代表するエースへと成長した。しか
し、二十九歳になる年に右肘靭帯損傷という大怪我を負い、二年間一線から離れ、リ
ハビリ生活に費やしていたのだった。

「ただいま」我が家に戻ると、息子の孝介が飛びついてきた。「お父さん、今日中岡
のおじさんが来るんだって」　とてもうれしそうな顔をしている。中岡とは高校時代
からの中で、ともに甲子園で活躍した仲間であった。今ではライバルチームである、
ヒューレット・コンドルズの四番打者で、球界を代表するスラッガーだ。

孝介は、父である智仁よりも中岡のファンなのである。毎年ホームラン王争いを繰り
広げている大打者に対して、智仁はこの二年間、試合にすら出ていないただのおじさ
んなのだ。

「何時ごろに来るって」妻である京香に尋ねると、彼女は忙しそうな表情を浮かべ
「三時ごろに来るんだって」　といった。スターが来るというので、大急ぎで夕食の
準備をしているらしかった。「あいつごときにそんなに大したことしなくてもいいっ
て」冗談交じりに言うと、球界を代表する選手なんだからとしきりに動き回ってい
る。「あいつはいいよな」出かかった言葉を無理やり押し込んだ。自分が怪我で活躍
できない間も中岡はどんどん活躍している。そんな弱音に近い言葉を吐きたくなった
が、そうしなかった。家族の前では、弱気を見せたくなかったのである。というよ
り、周りに自分の表情を出すのが嫌いなタイプなのだ。

これは、彼のポリシーで、野球をしているときも試合中に一度たりともガッツポーズ
や苦しい表情を見せないのだ。相手打者を打ち取るのは当たり前のこと、ピンチに
なっても全く不安ではないのだ、と思われたいのである。唯一彼が笑顔を見せるの
が、仲間の選手がミスをしたときだけである。エラーをすると野手はどうしてもしょ
ぼくれてしまうし、責任を感じてしまう。そうさせないためにも、彼はチームメイト
に笑顔を差し向けるのである。

「何か手伝うことあるか」京香に尋ねてみたが、何もないと言われたので、中岡が来

るまで軽く体を動かそうと思った。野球をやり始めた孝介をキャッチボールに誘う
と、喜んでついてきた。家の庭でキャッチボールを始めたのだが、孝介は常に心配そうな顔をしていた。智仁の肘のことを気にしているのだ。「どないしたん。もっと離れても大丈夫やで」孝介に声をかけると、激しく首を振った。「まだオフなのに無理をしたら、肘によくないよ」いつの間にオフという言葉を覚えたのか、なんだかおかしかった。つい吹き出すと、孝介は「何がおかしいの。僕へんなことといったかな」ときょとんとしている。智仁は柔らかな声で孝介に向かって「肘のことは心配するな。今年こそは絶対に、復活するよ」孝介は笑顔になった。その瞬間後ろから低い声が話しかけてきた。

「こんな寒い時期に、ボールなんか投げて大丈夫なのか」中岡だった。「えらい早かったな」返事をし、孝介にボールを投げ返そうとしたが、孝介は中岡のところに走り寄って行った。「孝ちゃん、またでかくなったか」中岡は孝介を抱きかかえ笑顔で話しかけている。中岡は、未だ独身貴族で子どもはもちろん、妻すらいない状態だった。ひとしきりじゃれた後、中岡は智仁に話しかけた。

「今年こそは復活できるんやろな」一瞬表情が厳しくなったが、孝介の大丈夫という

声にすぐに表情は和らいだ。「パパはちゃんと休んでるか」中岡が聞くと、孝介は首を二、三度横に振り、「いっぱい練習してるよ。今年だめだったら辞めさせられるかもしれないんだって」新聞の記事でなのか、ニュースで見たのか、孝介がそこまで知っているのを、智仁は初めて知った。驚いたが、あれだけ報道されていれば当然かと思った。「中岡のおじさんが来たって、ママに言ってきてくれるか」孝介にいうと、孝介は走って家の中に入っていった。家の中から京香があわてている声が聞こえた。

「急すぎたか」中岡はばつが悪そうにいうので、「別に、今に始まったこっちゃないやろ」といった。一瞬、中岡の視線が智仁の右肘に注がれた。智仁はそれに気づき、右肘をさすってみた。急に真面目な顔で中岡が話しかける。「肘の状態はどうなんや。今年もあかんかったらまずいやろ」

少し間をおいて智仁が答えた。「今年は絶対に大丈夫。これ以上あいつらやファンに心配かけたらあかんやろ」自信に満ち溢れた表情で答えたので、中岡の顔にも安堵の色が見える。中岡は、そっか、と一言だけ声にだし、何やら物思いにふけっているようだった。「お前こそ、今年こそ結婚せんとまずいやろ。一生独身は寂しいぞ」肘の

話を変えたくて、わざと中岡の話にすり替えた。「心配せんでも、俺はいつでも結婚
できるよ。お前と違って顔のつくりがいいから。」中岡とはいつも
このようなお調子
者なのだ。なぜこの男がいつまでも独身でいるのか、不思議でしょ
うがなかった。明
るい性格とスマートな顔立ち、高校時代も、毎年バレンタインの日
には大量のチョコ
が渡されていたのに。智仁が首をかしげて考えていると、中岡は笑
っていた。そんな
話をしていると、家の中から京香の呼ぶ声が聞こえた。ようやく準
備ができたよう
だった。表の道に初詣帰りと思われるカップルが、仲よく歩いてい
るのが見えた。
家の中では、娘の美穂子がこたつで寝ていた。応接間に中岡を通し、
ビデオ鑑賞の時
間が始まった。毎年正月の三が日には高校時代のビデオを見るのが
定番なのだ。京香
はよく飽きもせずみていられるわね、というのだが、毎回新鮮なの
だ。見るのは決
まって地方予選の決勝の試合だ。ここ数年は、孝介も横に座って一
緒に見ている。ビ
デオをセットし、再生ボタンを押すと少し粗い画像の野球の試合が
始まる。「この試
合のときって、もう肩を痛めてたっけ」中岡が智仁に尋ねる。どう
だったかな、とあ
いまいな返事をした智仁だったが、実際は鮮明に覚えているのだっ
た。準々決勝、準
決勝と延長戦になり、智仁はそれを一人で投げ抜いていたのだった。
大会前から肩の

調子が良くなかったのだが、控え投手がいなかったため、どうしても一人で投げない
といけなかった。決勝戦の試合前、中岡から今日は早めに点を取ってお前を楽にして
やるからといわれていた。この決勝まで、智仁は無失点で来ていたのだ。打撃陣の状
態がよくなく、どの試合も二点を取るのがやっとの状態であった。

「この試合のお前はすごかったよな。四本もホームランを打つなんか、信じられへん
わ」中岡が自慢げに鼻を突きだしている。「俺が本気を出せば、ざっとあんなもん
や」孝介が大きな目を輝かして中岡を見つめている。「この日はパパもホームラン
打ったぞ」智仁が孝介に声をかけると、「でも六点も取られてるじゃん」大きな目を
細めて孝介がいう。だよな、と中岡も続ける。悔しくなった智仁は
「けどそれまで全部〇点に抑えてたんやぞ。この決勝戦だけや」そういうと相手が弱
かったんでしょ
と、ビールとグラスを持った京香が入ってきた。

お互いにビールを注ぎ合って一口飲むと、二人の前にはつまみの蒲鉾が乗せられてい
た。きっとお節料理の残り物なのだろう。今年は珍しく、京香が一からすべて手作り
したらしい。その蒲鉾をほおばりながら、試合の続きを見る。「このホームランはい
まだに忘れられへんな」　智仁が感慨深げ言うと、中岡も同じセリフをいった。智仁

が野球人生で始めて打ったホームランであった。少年野球のころに、ランニングホームランを打ったことはあっても、柵越えの本当のホームランはこの一本だけなのである。

「きれいに腕をたたんで打ってるよな。肘の痛みを感じさせへん一発や。痛かったのはうそと違うか」中岡が笑いながらいった。球界を代表する打者にほめられ、なんか照れくさいな、と智仁ははにかんだ。

「しかし、あんだけ連投してよう我慢してたな。俺ならすぐに倒れてる」中岡がまたほめるので、孝介の目が少し尊敬の眼差しに変わっている。「なんとかして甲子園に行きたかったからな、先輩たちの分まで」不意に悲しげな表情に変わった智仁を見て、どういうこと、と孝介が尋ねてきた。

「孝ちゃんのパパは二年生からエースやったんや」中岡が説明し始めると、孝介は食い入るように話を聞き始めた。

「パパが二年生のときも、うちの高校は強くて優勝候補やったんや。でも、地方大会の準決勝で負けて、俺たちの先輩は甲子園に行けへんかった」中岡も少しさみしげな表情になっている。どうして負けたの、京香も知らぬ間に食い入るように話を聞いて

いた。「俺が大事なところで打たれた。それで敗退、さよなら。甲子園もさよならってわけ」智仁は笑って話しているが、目の奥は笑っていなかった。なにか犯罪者が、過去に犯した自分の罪を語っているような表情だ。

二年生から早くもエースナンバーを背負い、県内でも屈指の好投手として有名だった。地方大会でも優勝が確実視され、プロのスカウトも何球団かがその実力を見に来ていたのだった。そして、一回戦から順調に勝ち上がり、迎えた準決勝、相手は昨年の優勝校で全国大会にも何度も出場している強豪校だった。試合の前半は智仁たちの高校が完全に押していた。先制、中押しと順調に得点し、ほぼ勝利を手中に収めていたのだった。しかし、落とし穴が待っていたのだった。七回までほぼ完璧に抑えてきたのだが、八回に相手打線につかまってしまう。あまりの順調さに気が緩んだ智仁は、なんと七失点もしてしまったのだ。結局六対八で試合は敗れ、甲子園出場を逃してしまったのだ。

試合後、先輩たちは智仁に対して何一つ文句もいうこともなく、逆に感謝の言葉をかけていった。智仁にはそれは余計につらいものであった。自分が油断しなければ、最後まで集中を切らさなければ負けることはなかった。それに先輩たちに甲子園でプ

レーしてもらえた。罪悪感でいっぱいになっていた。その試合から、智仁は試合中に
表情を崩すことをやめたのだった。どんなに勝利が見えている状況でも、いっさい表
情には出さないように心に決めたのだった。

「それでパパは無表情で投げるんだ」初めてその話を聞いた孝介は感心していた。
「けどピンチの場面を切り抜けた時くらい、ガッツポーズしたらいいんじゃないの」
妻の京香が聞く。実際、ピンチを切り抜けた時くらいは表情を崩してもいいのだろう
が、智仁はそれも嫌がった。油断につながる可能性があるからだ。
智仁は「三振取ったり、ピンチを切り抜けるのなんか、俺なら当たり前やからわざわざ喜ぶ必要もないやろ」　周りから表情を崩さないことへの質問を受けると、いつもこの答えをいっている。中岡はそれを聞いて笑い、京香は何かっこつけてんのよ、と台所へ新たなビールを取りに行った。孝介も話に飽きたのか、リビングへテレビを観に行った。ぬるくなったビールを飲み干すと、中岡ら右ひじの状態のことを聞かれた。

「医者がいうにはもう大丈夫らしい。ただ、なんとなく感覚が違うんだよな」右腕を
見ながら智仁は答えた。二年間、まともにボールを投げていない。
感覚が戻らないのは当然なのだが、そのブランクとはまた違った感覚のずれを感じていたのだ。「秋季

キャンプで軽くは投げたんだろ。痛みはないのか。」中岡に尋ねられたが、智仁は答えなかった。気にせず中岡は問い続けてきた。「痛みがひいていたとしても、どこか無意識のうちにかばって投げてしまうから以前と違う感じがするのかもな」一人で納得するように話した。

「ま、春季キャンプでどうなるか試してみるさ」智仁は鼻をこすりながら、無邪気な笑顔を作っていた。この鼻をこするのは智仁の癖で、わくわくしているときによくするしぐさである。それを見た中岡は「いい年して子供みたいな顔してるぞ」つまみの蒲鉾を頬張り、ビールを口にした。中岡の空いたグラスにビールを注ぎながら、今度は智仁が話しかけた。

「お前の方はどうなんだ。今年から最高年俸選手になったんやから、プレッシャー大きいやろ」冗談ぽくいったのだが、中岡の顔は笑っていなかった。「正直かなりのプレッシャーやな、そんな期待されると」珍しく顔が曇っている。中岡が所属する球団は、日本でも一、二を争う熱狂的なファンがいることで有名なのだ。智仁も怪我をする前までは、よく野次られたものだった。

今年はお前が野次られる姿を見れるな、智仁がグラスを片手にいうと、「野次られる

のは慣れてるし、別に気にはならない。ただ、金額に見合うだけの成績が残せるかが不安でな」中岡がぽつりといった。球界を代表する四番であり、これまで数々のタイトルも取ってきた打者だ。しかし、性格は心配性で、常にマイナス思考な男なのだ。だからこそ、怪我やスランプも少なくすんでいるのだと智仁は思う。

お前の性格はうらやしいよ、と高校時代からよく話していた。もし俺に中岡のような性格があれば、先輩たちを甲子園に連れて行くこともできたろうし、こんな大怪我もしなかったのだろうと智仁は思った。

「お前なら大丈夫や。それだけ気にしてるんなら自主トレもきっちりするんだろ」野球選手は、この寒い時期はオフのシーズンがあけると一斉に自主的にトレーニングを重ねていく。そして春のキャンプを迎えるのだ。

「今年は若手も大勢ついてくるみたいやから。自分のペースでできへんかもしらんな」中岡がいうと、「お前の練習量を見せてやればいいんだ。それが若い選手たちにいい手本となるよ」智仁が笑顔で中岡にいう。事実、中岡の練習量は半端ではなかった。心配性だから納得いくまで打ち続ける。高校生のころから中岡の手は、マメだらけでかちかち、石みたいだった。

「お前はどうするんや。若手を連れて行くんか」中岡に聞かれた。
智仁は、首を横に
ふった。「一人でやる方が気楽や」そういうとグラスに残ったビー
ルを飲みほし、あ
おむけに寝転がった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9680t/

ガラスのエース

2011年10月9日04時13分発行